

愛媛県IPM実践指標モデル(施設トマト)

	管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄(注1)		
	対象	技術			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	ウイルス病等	発病株(株・葉)の除去	ウイルス病等全身症状を示し、伝染源となる株は、早急に抜き取り適切に処分する。果実(葉)にのみ発生する場合は被害果(葉)を除去し適切に処分する。	1			
	病害虫	病害虫の伝染源の除去	圃場周辺の発病トマト、野良生えトマトを除去する。	1			
		病害虫の伝染源の除去	圃場及びその周辺の除草を行う。	1			
		抵抗性品種導入	葉かび病、モザイク病等の抵抗性品種を導入する。	1			
			土壌病害虫抵抗性台木を導入する。	1			
		無病土による育苗	床土には無病土を用いる。	1			
		健全種子の使用	無病種子を導入する。	1			
		健全苗の育成	開口部を防虫ネット(1mm以下)で被覆した育苗施設で育苗する。(注2)	1			
		健全苗の定植	健全苗を定植する(上記3点を満たした苗を購入した場合は3点)。	1			
	病害	湿度管理	排水や換気等により適切な湿度管理する。	1			
	病害	器具の消毒	ハサミ等の作業器具の消毒を励行する。また、管理作業は、こまめに手を洗淨しながら継続する。	1			
	病害	資材の消毒	支柱等の資材を消毒又は更新する。	1			
	病害	管理作業	芽かぎや摘葉の管理作業は傷口を最小限にするよう心がける。降雨時等の多湿時には芽かぎや摘葉を避ける。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行う。また、有機物を適切に施用し、草勢・根活性を良好に保つ。	1			
防除の判断要否及びタイミング		病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農林水産研究所の発表する農業技術情報等入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1			
		病害虫の発生状況の把握	黄色粘着トラップ、フェロモントラップ等を利用するとともに、圃場観察を丁寧に行い発生状況を確認する。(注3)	1			

生物的防除	病害虫	天敵等の利用	天敵製剤や微生物農薬を適切に利用する。	1			
		選択性農薬の使用	農薬を散布する場合は天敵に影響の少ない剤を選択する。(注4)	1			
物理的防除	害虫	近紫外線除去フィルム	施設の被覆資材の近紫外線除去フィルムを使用する。(注5)	1			
	害虫	防虫ネット	施設開口部には防虫ネットを設置する。(注2)	1			
	雑草対策	畝の被覆	シルバーマルチ等被覆資材を導入する。	1			
		畝間の被覆	畝間は稲わら等の有機物資材によるマルチを行う。圃場周辺は定期的に除草する。	1			
	病害虫	栽培終了時の処理	栽培終了時には病害虫の拡散を防止するため、ハウスを締め切り、病害虫を死滅させる。(注6)	1			
化学的防除	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる適切な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	作用機作の異なる農薬をローテーションで使用する。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されていない農薬を使用する。	1			
	害虫	定植時植穴粒剤の施用	必要と判断された病害虫のみを対象とする農薬を使用して、植穴処理を実施する。 ①当該地域での病害虫の発生状況 ②病害虫発生予察情報 ③当該圃場での前作の病害虫発生状況(注7)	1			
その他	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMIに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
合計点数							
対象IPM計							
評価結果							

注1：チェック欄では、未実施の場合は0、農薬未使用等当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「-」と記す。

注2：防除対象の害虫の大きさにより、資材の目合いを決定する。目合いと害虫の侵入防止効果の目安は以下の表の通りである。

目合い	コシヅナミシ	ハモグリバエ類	アザミヤカ類	アブラムシ類	キスジノミハムシ	鱗翅目（ハモシヨトリ等）	（コナカ）
0.4mm	○	○	△	○	○	○	○
0.6mm	△	○	×	○	○	○	○
0.8mm	×	△	×	○	○	○	○
1mm	×	×	×	△	△	○	△
2mm	×	×	×	×	×	○	×
4mm	×	×	×	×	×	○	×

注) 侵入防止効果 ○:90%以上、△:70%以上、×:50%以下

注3：黄色粘着トラップでは、コナジラミ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類、天敵寄生蜂が捕獲できる。

注4：天敵に影響が少ないといわれる農薬でも、天敵群によっては影響を受ける場合がある。また、悪影響があっても残効性が短いため、天敵の活動への影響が少ないものもあるので、農薬の散布時期と特徴を考慮して剤を選定する。

なお、生物農薬の使用は天敵類の保護のみならず、薬剤抵抗性発達の遅延等にも有効であるが、防除効果は施用法や病害虫の発生量等の影響を受けやすいので、剤の特徴を十分把握して施用する。

注5：近紫外線除去フィルムは、コナジラミ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類に対して侵入抑制効果がある。

マルハナバチを利用する場合、資材の種類等条件によってはハチの活動に影響があるので注意する。

注6：収穫終了後には株元を切断し、40℃以上で7日以上(できれば10日以上)施設を密閉して蒸し込み処理を行なう。

蒸し込み時の注意として、わずかな隙間から逃げ出すので密閉は夕方に行なうなどの工夫をする。

注7：粒剤は処理後1ヶ月程度天敵昆虫類に影響があるので、天敵放飼は防除指針などで確認する。